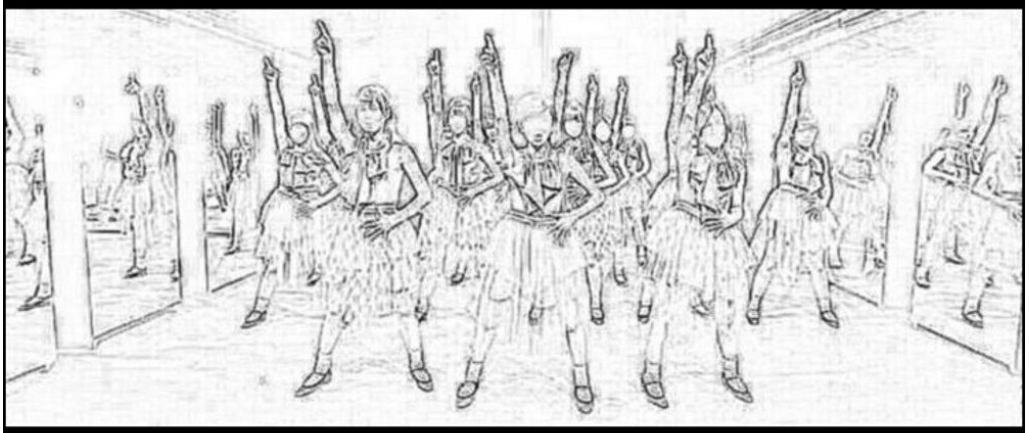
女性論

序説



みどりのくま

目次

はじめに 1
１　元始女性は太陽であった 2
２　男らしさ女らしさという問題 4
３　恋について少々･･･ 6
４　女性の哀しみについて 8
あとがき 11

奥付
奥付 14

はじめに

昨今、女性の社会進出についての議論が脚光を浴びています。

少子化・人口減社会の克服には「女性のチカラ」が必要不可欠であるからです。

専門家ではない私が、個々の施策について具体的な言及をすることはできません。皆でどうすることが一番であるのかを考えて答えを出すべきことだと思います。

そんな私がなぜ「女性論」などということをここで語ろうとするのか、その理由を述べなければならないでしょう。

・

それは、日常の中でそうした議論を拝聴するなかでおぼえた違和感というものが発端なのです。

今、議論がされているのは短期的な対症療法のことであると思います。

少子化・人口減社会を克服する目処をどのようにしてつけるのかという議論です。

それは、数十年のスパンで考えることであるから、それを短期的と言うことは間違いであると言われるかも知れません。

今の危機の回避が最優先課題であるのだから、対症療法であることは仕方がないだろうと言われるかも知れません。

そして、私はそのことに同意しますし、議論そのものに不満や反対があっての違和感なのではありません。

・

私の違和感の正体。

それは、今行われている議論について一定の目処がついたところで、女性にまつわる問題の議論が終わってしまうのではないかという虞であるのです。

つまりは、少子化・人口減社会の克服、そのための議論で終わってしまうのではないかということです。

つまりは、女性にまつわる問題の最終的に目指すものとは一体何であるのかということは全く考慮されていないということです。

そこで、女性にまつわる問題の、最終的に行き着く先には何があるのかについて考えてみたくなったという次第なのです。

・

女性の社会進出についての議論は、つまりは女性の社会的位置の問題についての議論です。

これは、新しいようで古い議論です。

そこで、具体的な社会運動として、女性が独立した個人の確立を要求する声を揚げた今から 100 年ほど前の事についてから話を起こしたいと思います。

1　元始女性は太陽であった

※この章における引用は全て「「青鞜」女性解放論集 堀場清子編岩波文庫」からのものです

「元始女性は太陽であった」

この有名な一節は、1911 年 9 月に女性のみによって出版された日本初の文芸誌「青鞜」創刊宣言として平塚らいてうによって書かれたものである。

書き出しの次の一文、ここに全ては言い表されているように思う。

元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。

今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。

つまりは、この世に人間として男女が生まれたときそこに人間として差など存在しなかったはずなのに、現実の社会において女性は男性という他者からの影響の下でしか存在し得ないものに” されて” しまったということである。

男性の都合で形成された社会において、女性は本来持つ人間としての権利を制限されて「家庭」という檻に押し込まれている。

だから女性は自らの意志でこの檻を壊して自らを解放し、再び太陽として自らの力で輝かなければならない。「真正の人」であることを取り戻さなければならない。

みなさんも機会があれば全文をお読みいただきたい。言葉遣いには時代を感じるけれども、その内容は今の世においても決して古びたものではないことがわかるだろう。

それは、100 年あまりが経った現代においても根本において何も変わってはいないということであると思うのです。

.

さて、事実として男女に差、つまりは能力差というものは存在していないにも関わらず未だに俗説として男女に生物学的能力差があると盲信している特に男性の意識を変えることから始めなければならないということですが、この手の話は他でもいくらでも語られているから、あとで少しは触れるけれども、ここでは繰り返さない。抵抗勢力というのはしぶといという感想だけにしておきます。

私は、その先のことについて注目すべきだと思うのです。

らいてうは次のように述べています。すこし長いですけれども引用します。

･･･しかしただ外界の圧迫や、拘束から脱せしめ、いわゆる高等教育を授け、広く一般の職業に就かせ、参政権をも与え、家庭という小天地から、親といい、夫という保護者の手から離れていわゆる独立の生活をさせたからとてそれが何で私ども女性の自由解放であろう。

なるほどそれも真の自由解放の域に達せしめるによき境遇と機会とを与えるものかも知れない。しかし到底方便である。手段である。目的ではない。理想ではない。

つまり、女性が男性と同等に社会に参加することはひとつの段階であり、その先があるのだということです。

では、その先とは何か。

それは簡単には言えないのでしょう、「うちなる潜める天才の発現」という抽象的表現にとどまっています。

それはもしかすると 100 年後の我々に託した宿題なのかもしれません。

そこで、次から私の女性論を展開して私なりの結論へたどりつく試みをしてみたいと思います。

２　男らしさ女らしさという問題

まずは、男らしさ女らしさという問題について考えてみたいと思うのです。

・

社会生活を送るうえで、この概念はたとえ直接的ではないとしても女性の日常に影を落としていると思います。

最近は少なくなってきた、と言われるほどにはこれに端を発する問題は解消されてはいないのです。

それはいまだに性差別の方便として利用されていると思います。

そして、女性が社会において活躍しようとするとき、それを快く思わないひとたちが批判を加えようとするときにその拠り所とする基礎的概念として生き続けています。

そうであるから、女性の活躍を邪魔するこの概念の「中身」をひとつひとつ点検して、その時代錯誤であることを指摘して反論することをしてきたと思う。

それは今も継続して行われていると思う。

・

しかしここで、もしかしたらその視野から抜け落ちているのではないかという仮定で指摘したいことがある。周知のことであるならばそれは私の不明であるからご容赦いただきたい。

・

女らしさという概念が女性を縛る。

だからその概念の間違いを指摘してひとつひとつ正してゆく。

この方法は一つの可能性として採用する価値はあると思う。

しかしこれは闘争の初期における、つまりは女性の活躍を認めさせる反攻の始まりにおける一手段であると思う。

では、何を最終目標として設定するのか。

女らしさという概念の無意味さを証明するに留まらず、それは男らしさ女らしさという概念そのものの消失である。

つまりは、男らしさというものもこの世から消え去るということです。

誤解を恐れずに主張するならば、男性も男らしさという呪縛から解放されなければならないのです。

・

現段階で私たちは、生まれてすぐから男らしく女らしく育てられる環境にいるのです。

だから、それが意識的であろうが無意識であろうが、そうした育て方・しつけ方から脱出しなければいつまでもこの問題の解決は果たされないのです。

少なくとも社会的立場としての男性の一般化された像・女性の一般化された像というものが成育過程で刷り込まれる状況というものを無くしてしまわなければならない。

そのためには、社会的立場としての男女の区別のない統一された像というものを作らなければならない。

将来社会を担うひとりの個性として参照することのできる人間像というものを確立しなければならない。

それに基づいて教育することのできる理想的人間像というものが確立すれば、少なくとも社会的立場において性別による差別は消滅するのではないかと思うのです。

３　恋について少々･･･

ここで、本論から外れると思われるかも知れませんが、恋について少し論じてみたいと思います。

.

社会的立場としてとはいえ、男女というものがいつか消失するかも知れないと考えたとき、ではこの世から恋というものは無くなってしまうのかと思うと、とても悲しい気持ちになる。

恋というものは、青春のある時期において、欠くことのできないものであると思う。

そこで、恋を手放したくない気持ちに応えるために、恋の可能性について考えてみたい。

.

恋は精神においてするものかそれとも肉体においてするものか。

このテーマについて意見はそれぞれあると思う。

私のイメージは、精神と肉体の両方でするものだと思う。

もっと正確に言うならば、精神のみで構成された幼き恋と肉体においてする世俗的な愛とのあわいに存在する一瞬の幻影が恋であると思う。

私はそう考えるときに、男女というものがいつか消失するのならば、恋は精神の側へ行かざるを得ないのだと思う。

恋は肉体を離れざるを得ない。

それは、今私たちが恋と呼んでいるものとは別なものへと変化せざるを得ないのだと思う。

・

では、その恋とはどのようなものであるかを想像してみたい。

それは、精神の遊戯であると思う。

恋が成就することを喜び、失恋することを悲しみ、恋の駆け引きに悩まされる。

そうした「心」の内側で一喜一憂することを楽しむものとして恋は存在し得るのだと思う。

そして、重要なことは、恋は肉体を離れることで可能性を拡げるのだ。

つまり、恋は生物学的男性と生物学的女性がするものであるという「常識」は消失する。

恋において、生物学的な性はその意味を失うのであるのだから。

・

このことは、次に述べることへの準備となるのです。

４　女性の哀しみについて

女性の活躍を支援しようとする動きはまだ緒についたばかりです。

その責にある人たちが具体的なことを議論しはじめたばかりであるから、その行方を見守りつつ期待するということでしょうか。

その中で特に注目されるのが、少子化の解決と女性の社会進出をいかに両立させることができるのかということです。

専門知識を持たない、そして何の権限も持たない私がここで具体的なことに言及したところで巷間に流布することの劣化コピーにならざるを得ないからあまり意味は無いでしょう。

そこで、種々の具体的方策が実現した後、やがていつかは直面しなければならないことについて、それを「女性の哀しみについて」と題して述べてみたいと思うのです。

・

現代においては、男女のパートナーが子供を設けて育てるということが一般的です。

このとき、女性が相対的に重責を負うことをいかに緩和するかということが現在行われている議論であると思います。

しかし、いかなる方策を採用したところで、それはパートナーや社会によるサポートであることを超えるものではありません。

最終的にどうすることもできないことが残るのだと思うのです。

それは、女性の「産むことの哀しみ」なのです。

誤解があるといけないから補足をすると、産むことを苦役であると決めつけたいわけではありません。

産むことの喜び、産むことの楽しみがあることは言うまでもありません。

それを踏まえたうえでなお、産むことがもたらす喜び・楽しみ・不安・苦悩、そういったものの総体として「産むことの哀しみ」と表現するのです。

そしてこれは、生まれたときから女性だけが背負う宿命であるのです。

なぜなら、パートナーである男性がいかに願おうとも、代わりに産むことはできないのだから。

そして、これも誤解なきように補足するならば、女性が自らの意志で産まない選択をすることを否定するものではありません。女性だから産まなければならないと言いたいわけではありません。

しかし、私は思うのです。

自らの意志で産まない選択をすることで、「産むことの哀しみ」から解放されるわけではないのだと。

それは、繰り返しになるけれども、パートナーである男性が産むことを選択できない限りにおいては、この非対称性がもたらす哀しみは消えないのです。

つまりは、産まない選択をすることは同時に自らの子供をあきらめるということであるのだから、これを自由意志による選択であるとは言えないのです。

これは、やむを得ぬ選択を迫られた女性が下すつらい結論であるのだから。

・

では、女性の「産むことの哀しみ」を解消するにはどうすればよいのか。

それは文字通り女性が「産む」ことから完全に解放されることしかない。

・

では、そんなことが可能かと問われれば、現在においては不可能であることは明らかです。

だから、遠い未来において実現を目指す理想として話を進めたい。

・

恋を通してお互いをパートナーとする決意をしたふたり。

生命の元となるものを胚と呼ぶならば、ふたりの体細胞から生成された胚を孵化器（それはイメージとして人工子宮というものだろう）で育て、やがてそれは外界で生存可能なまでに成長をして、そして「産まれる」のです。

そうして生まれた子供を、パートナーが協力し合いながら一人前になるまで育ててゆく。

やがて成長した「人」は、どこかで「人」と出会い恋をするだろう。

・

もうおわかりのように、この時代においては生物学的な性は意味を消失している。

パートナーは、生物学的に男性と女性であってもかまわないし、男性どうしであってもかまわないし、女性どおしであってもかまわないのだから。

・

この理想が実現したとき、そこに女性であることが抱えてきたものは解消されるのだと思う。

もちろんそれはまだ遠い道程であるから、それまではいかに女性であることの哀しみを社会全体（もちろんパートナーも含めて）で緩和するかということを考え続けることになるのです。

あとがき

この短い文章のタイトルを「女性論」としたことに違和感を覚えられたことだろう。

これのどこが女性論なのか。それに対する回答は次の通りです。

現代社会は、幾分改良されたとはいえ、男性中心の社会です。

男性は自らの都合がよい現状を維持しようとする、つまりは保守の側にいます。

ひるがえって女性は、この現状を打破しようとする革新の側にいます。

つまりは、これから社会変革を企てるのは女性であるから、未来を語ることは女性を語ることである、ということです。

・

また、この文章では私の個人的意見（願望？）を述べただけにすぎないから、何の結論でも無い。だから序説とした。

この文章を読んだあなたが、もし何らかを考えるきっかけとなるのならば、それは私にとって最上の喜びであるのです。

・

最後までこの荒唐無稽な話を読んで下さったあなたに感謝いたします。

・・

２０１６年6月 みどりのくま

奥付

奥付

「女性論」序説

https://puboo.jp/book/107949

著者：みどりのくま
著者プロフィール：https://puboo.jp/users/ktnwtuy001/profile

感想はこちらのコメントへ
https://puboo.jp/book/107949

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/107949

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（https://puboo.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ

「女性論」序説

版番号の予定

{{--
--}}

著　者　　書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社